

司馬遼太郎著「花神」にみる発達障害

鷲塚伸介

昨今、「発達障害（自閉症スペクトラム障害）」が何かと話題になることが多い。「対人コミュニケーションが不得手」で「共感性に乏しく」、「特定のものへのこだわり」が顕著で、「感覚の過敏さ、または鈍感さ」を認めることもあり、「粗大運動の障害」から運動神経が鈍いと言われることも多く、「微細協調運動の障害」のため無器用さが際立つ者もいる。診断にはこれらの症状すべてが必須というわけではなく、コミュニケーション能力の障害と、こだわりの強さが重視される。児童精神科で扱われることが多いので、子どもの障害と思われがちだが、成人にももちろん存在する。

現代日本のように、コミュニケーション能力の高さが重要視され、「空気を読めない」人間が「KY」と揶揄される環境では、発達障害を抱えた人は非常に生きづらい立場に置かれている。児童に対しては早期発見、早期援助のシステムがかなり充実して、学校や職場に適応できる人も多くなったが、幼少時期に発達障害を見逃され成人になってから診断がついた人については、さまざまなトラブルが起きて本人も周囲も苦労していることが稀ではない。残念ながら、このようなケースへの支援は簡単ではなく、社会に適応できず何度も職場を餓首されて、最終的にうつ状態になってしまう方もいる。

しかし、彼らは能力にばらつきが非常に大きく、欠落した部分を補うかのように、ある側面では人一倍優れた能力を併せ持っていることがある。歴史上、社会をリードする業績をあげた人物の中に発達障害と推測される者も少なくない。なぜ彼らが社会で活躍できたのかを振り返ることで、現代の発達障害者への好ましい関わり方のヒントが見つかるかもしれない。本稿では、司馬遼太郎の史伝文学「花神」の主人公である「村田蔵六（のちに大村益次郎と改名）」を通して、発達障害者への対応を考えてみたい。

大村益次郎は、江戸時代の末期に長州の村医者の子に生まれ、緒方洪庵の主宰する適塾でオランダ語と蘭方を学び塾頭を務めた。その後宇和島藩に請われて蘭書だけを頼りに蒸気船を作ったことから世にその名を知られるようになり、やがて幕府の蕃書調所教授を経て長州藩の軍事責任者となり、戊辰戦争で官軍を勝利に導いた人物である。「花神」では一貫して「村田蔵六」名で話が進行するため、本稿でもそれに倣うことをお断りしたい。

「花神」から蔵六のふるまいをいくつかとり出してみる。

①（村医者をしている頃、百姓が）「お暑うございます」とあいさつをする。このとき蔵六は立ち止まる。体をその野良百姓のほうへむけ、「暑中は暑いのがあたりまえです」と、こわい顔でいった。百姓はあきれた。…蔵六からこういう応答を受けたものが、みな肚をたてた。

②（蔵六が宇和島藩で作った蒸気船が試験航海に成功し、乗船していた家老が嬉しさのあまり）「村田、進んでいるではないか」とふりかえって叫んだ。が、蔵六は悪いくせが出た。「進むのは、あたりまえです」これには（家老の）松根もむっとしたらしい。そのほうはなんだ、物の言いざまがわからぬのか、といった。

③ 蔵六という男はつねに言葉に断定があつて、言いだすと取りつく島もないような調子なのである。…そのため生涯ひとに誤解され、ときには傲岸であるということで嫌悪された。蔵六という男はまったくちがう。傲岸ということが煙ほどもない男なのである。

蔵六はコミュニケーション能力や共感性に欠け、社会性にある種の欠落したところがあることが想像できるが、こういった蔵六の特徴は、精神医学的にはまさしく「発達障害」の症候に合致する。蔵六は村医者として流行らないばかりか、のちに官軍の司令官となつてからも「参謀局やそのまわりで蔵六の評判はきわめて悪かつた」のであるが、本人に全く悪意はなかつた。発達障害を裏付ける傍証はほかにもあつて、二年かけても馬に乗れるようにならなかつたほど無器用だつたこと（粗大運動の障害）、書生の頃から晩酌は銚子二本に豆腐一丁と決まつており、客を迎えてもそれを変えなかつたこと（こだわりの強さ）、高官となつてからも軍服を含む洋服や靴は一切着用せず、賤士のはく半袴をつけて平然としていたこと（こだわりの強さ、肌の感覚過敏の疑い、社会性欠如）など枚挙にいとまがない。

それでは、蔵六はどうして社会から排除されずに世に出ることができたのだろうか。長州藩で蔵六を見出したのは、桂小五郎であつた。桂は蔵六の人間関係下手には目をつぶり、蔵六の豊富な西洋の軍事知識と、徹底した合理主義思考に着目し軍事専従者であらせ続けた。一例をあげれば、長州藩は新式の元込め銃を大量に欧州から買い付ける必要があつたが、桂が蔵六にその仕事を任せるところ、人間関係の機微がわからないことが原因となつて全く埒があかず、結局は伊藤俊輔（博文）と井上聞多（馨）に代行させることになつた。しかし、桂はその失敗で少しも蔵六の評価を下げることはせず、それ以降、いっそう軍事指揮官としての役割に特化させた使い方をした。村医者あがりで軽侮されがちな人物を引き立て、社会性やコミュニケーション能力欠如からくる悪評には徹底してかばい、蔵六を守つた。

桂の行つたことをまとめると、① 秀でた能力を生かすことだけに集中させて、何でもそつなくこなすことは最初から期待しない。② 本人の苦手な領域を熟知し、それが仕事を遂行するうえで支障とならないように根回しや環境調整を行う。③ たとえ能力欠如の部分で失敗したとしても評価を下げないという3点にならうか。現代では、たとえば桂のような強いリーダーがいたとしても、組織体制や人事評価の方法などを見直さないかぎり上記のような対応を行うことは困難だろうし、仮にそれが行われたとしても蔵六のような人物の活躍できる場は限定されたものになるだろう。しかし、桂のやり方は発達障害者への関わり方として、大きな示唆を与えていることも間違いないのである。

司馬は、宇和島藩で蔵六を庇護した藩医、二宮敬作にこんなことを言わせている。「天才とは頓狂人だが、西洋人はそういう者を愛し、それをおだて、ときには生活を援助して発明や発見をさせたりする。日本人は頓狂人をきらうから遅れたのだ」と。そしてまた、「尊公（蔵六のこと）は、古今未曾有の頓狂だ。…古来文明を興したり、あるいは人類を救済してきたのは、そういう精神だ」と。「頓狂人」が「天才」とは限らないが、「頓狂人」を排除せず、その能力が尊重される世になつたとき、もしかしたら今以上に多くの「天才」が現れ、ある分野では、日本に革命的な変化が起きるかもしれない。

（信州大学医学部精神医学教室教授）